

日中大学生の性別違和に対する態度の違いと性差の検討

その他のタイトル	Gender Differences of Gender Dysphoria Attitudes among College Students in Japan and China
著者	陳 曦, 守谷 順, 脇田 貴文
雑誌名	関西大学心理学研究
巻	13
ページ	55-65
発行年	2022-03
URL	http://doi.org/10.32286/00026168

日中大学生の性別違和に対する態度の違いと性差の検討

陳 曦 関西大学大学院心理学研究科
守 谷 順 関西大学大学院心理学研究科
脇 田 貴 文 関西大学大学院心理学研究科

Gender Differences of Gender Dysphoria Attitudes among College Students in Japan and China

Xi CHEN (Graduate School of Psychology, Kansai University)
Jun MORIYA (Graduate School of Psychology, Kansai University)
Takafumi WAKITA (Graduate School of Psychology, Kansai University)

In both Japan and Mainland China, few studies assess attitudes towards gender dysphoria. The purpose of this study was to compare the attitudes towards gender dysphoria between Japanese and Chinese college students. Japanese (92 males, 251 females) and Chinese college students (103 males, 206 females) answered 56 items about attitudes towards gender dysphoria, which were collected from previous studies. We found that male had higher psychological distance and lower romantic feelings than female regardless of Japan and Mainland China. Chinese had higher psychological distance and romantic feelings than Japanese. They have the lowest level of social approval for gender dysphoria. Moreover, positive minority empathy is lower in female than male.

Keywords: gender dysphoria, attitudes, prejudice, Japan-China comparison, Gender Difference

問題と目的

世界最初の性別適合手術¹⁾を実施して以来、性別違和に対する研究動向は常に変化している。初めて性別違和を臨床的な障害として定義したDSM-III (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, third edition) から現在最新版のICD-11 (International Classification of Diseases 11th Revision) で性別違和を精神疾患から外されるまで、38年間がかかった。

現在、性別違和に対する態度の研究は、主に欧米で進められている。多くの研究で一般の非当事者を対象としており、性別違和に対する嫌悪感やジェン

ダーバッシングなどが見られた (Chen & Anderson, 2017; Gerhardtstein & Anderson, 2010; Glotfelter & Anderson, 2017; Hill & Willoughby, 2005; Tebbe, Moradi, & Ege, 2014; Winter, Webster, & Cheung, 2008)。一方で、性別違和者への接触経験によって嫌悪感が低下することも示されている (King & Webster, 2009)。また、性差の検討においては、女性より男性で性別違和への嫌悪感が高く、特に異性愛者の男性で性別違和に対する偏見が高いことがわかった (Glotfelter & Anderson, 2017; Tebbe et al., 2014;)。その点に関して、Norton & Herek (2013) は、性別が男女に分類されるとする性別二元制を支持する人にとって、性別違和はその定義に違反する

存在と認識されるため、性別違和に対する嫌悪感が多く見られると指摘している。

日本社会における性別違和の現状

近年、政策や就労の分野で性別違和についての議論が増えている。性別違和を肯定的に捉える社会活動（東京レインボープライドやレインボーフェスタなど）も一般的になり、テレビ番組やインターネットの話題などで性別違和に関することも多く取り上げられている。しかし、「出生時のジェンダー」と「表出するジェンダー」が一致せず自分の性別に対して違和感のある性別違和者（APA, 2013）にとっては、現在でも生きづらい厳しい生活が続いている。針間・相場（2014）の性別違和者に対するインタビューでは、「うつ病になり、引きこもり状態になった」など自分の生き方に自信が持てない状況や、「女の子だからこうしなさい、こうすべき」、「（会社で）女性だと主張しない方がいいよ、みんなが反感持つから」など、他者からの否定的な態度に苦しんでいる状況が見られるという。実際2021年開催した東京オリンピックのウエイトリフティング女子87キロ超級に性別違和の選手が出場したことについても、世界中で様々な議論が巻き起こった²⁾。現実社会では、性別違和者は自分の「性別不一致」だけではなく、自分を取り巻く社会環境での他者の態度に対しても深刻に悩み、不安を抱え、社会からの理解と支持を求めていると言える。性別違和の支持には、自身のマイノリティの経験から、性別違和の過酷な体験を理解し、共感できる「マイノリティ共感」が必要と考えられるが（葛西・小渡, 2018; 葛西, 2019）、未だ十分とは言えない。

性別違和への研究は主に学校と職場の両方面で捉えている。角田（2018）は性別違和の学生はよく学校でいじめや暴力などを受け、自傷・自殺行為を起こしていることを指摘している。職場においては、就労や人間関係などの問題で苦しんでいる性別違和当事者も多くいると見られる（松嶋, 2013）。一方、性別違和への態度研究は十分に検討されているとは言いがたい。今までの態度研究は主に医療事務職、看護師になりうる学生を対象とし、医療現場における性別違和への偏見を軽減することを目的としている（日向・高田谷・近藤, 2007; 福岡, 2015）。日向他（2007）は看護学生を対象に精神疾患に対する偏見尺度を用い、性別違和への態度、知識、社会的距離、

性差観との関連を検討した。その結果、知識があるほどまた性差観が弱いほど性別違和に肯定的な態度を示す傾向が見られ、性別違和との社会的距離に近いことが示唆された。また、女性は男性より性別違和により近い社会的距離を示している。福岡（2015）では、医療系大学の学生に対し、精神疾患に対する偏見に関する項目から性別違和へのイメージを測定し、性別違和に対する知識と接触経験との関係を検討した。その結果、知識が多いほど社会的距離が縮まることが明らかとなった。男性よりも女性の方が性別違和に肯定的な態度を示した。また、性別違和への接触経験が多いほど、性別違和に対して身近で尊敬できるといったポジティブイメージも示していた。日向他（2007）や福岡（2015）では、性別違和を精神疾患としてとらえており、接触する機会の多い医療領域の学生を対象とした態度研究は重要である。しかし、性別違和はすでに脱病理化されており、対象者においては、医療関係の学生だけではなく、幅広い分野の学生の態度をとらえることも必要とされる。

中国社会における性別違和の現状

中国での性別違和への研究は未だに十分なされていない。中国では、「性」という言葉はとても敏感な話題である。学校と家庭では、「性」と言えば常に「性行為」あるいは「生殖器」と関連づけられる（張・梁・龍, 2018）。特に中国本土では性の問題は表に語るべきではないという風潮があり、「性」を汚い言葉として扱い、性別違和の存在も古くから「特別視」の存在として見られてきた。そのため、中国本土では性別違和当事者は自分の存在を隠し、主に非公開な状態になっている（李・王, 2018）。

性別違和の正しい認識を広げている研究も数多くあるが、伝統的な性別二元制の思想に支配された研究も少なくない。例えば、陶・張・張（2005）からは、高校生を対象とした研究では、両親の不仲が性別違和者に影響を与え、性別違和は心理的問題であると指摘している。さらには、性別違和者は心理的性別を矯正し、生理的性別と一致させるための努力が必要であると示唆している。強い性別二元制の考え方の影響により、性別違和の存在は依然タブー視されている。しかし、性別二元制規範と家庭環境の問題が性別違和に影響を与える唯一の要因とは言えない。中国本土では性別違和に対する十分な知識が

提供されていない可能性が高く、性別違和に対する態度にも影響を与えていると考えられる。

日中比較の必要性

異なる文化、異なる社会的背景を持つ大学生が性別違和に対してどのような態度を取るかについて、河嶋（2018）は日中大学生のトランスジェンダー³⁾に対する認知と意識を比較した。「トランスジェンダー」という言葉に対して、日本人大学生の認知度は74.4%であり、中国人大学生の認知度は42.0%であった。そして、言葉の由来では日中とも「インターネット」と「テレビ、映画、DVD」から知った割合が高かった。しかし、38.9%は「学校」から知った日本人に比べ、中国人が「学校」から知った割合はゼロであった。また、トランスジェンダーの当事者に対する意識では、「身体の性と反対の性別を生きる人たちのことをどう思うか」という質問に「おかしくない」と答えた日本人は8割以上であった。一方、中国では、「おかしくない」と答えた人は5割しかいなかった。日本大学生と比べ、中国大学生の方がトランスジェンダーに対する認知度が低く、男女問わず意識が非受容的であることが示された。また、男性と比べて受容的な意識を持つ女性の割合が高かったと考えられる（河嶋，2018）。

日中において、性別違和に対する意識の違いから、態度にも違いがあると予測される。しかし、河嶋（2018）の研究では、性別違和に対する態度を具体的に検討していなかった。日本では、新聞やテレビなどのマスメディアにおいても、インターネットなどのソーシャルメディアにおいても、性別違和は公表できる存在である。中国では、マスメディアにおいては未だに公表しづらい存在だが、ソーシャルメディアを含むインターネット上においては、性別違和に関するニュースと認知が少しずつ増えていることが現状である。また、日中において、共に「性別二元制」の視点を性差の基盤として置いている（湯川他，2013；趙・斉藤，2019）。多くの相違点を有している日中環境に焦点を当て、日中の大学生が性別違和にどのような態度を与えているかを検討することを本研究の目的にする。

性別違和への態度と関連する尺度

態度尺度に関して、欧米ではLGBTに対する共通した態度が確認されており、複数の尺度が開発され

ている（Morrison, Bishop, & Morrison, 2019）。特に脱病理化された同性愛者への態度研究は、性別違和に対する態度尺度を考える上で参考になる。同性愛者への態度研究の結果は、性別違和に対する態度と似ており、男性よりも女性のほうが同性愛者に対して好意的であり、心理的距離が近く、ポジティブなイメージを持っている（鈴木・池上，2015；和田，1996；山下・源氏田，1996）。日向他（2007）や福岡（2015）の結果も考慮すれば、性別違和に対しても男性の否定的態度が予測され、性差の検討が必要である。また、先行研究により、知識や接触経験は否定的態度と負の相関が予想される。また、自身の出生時のジェンダーに対する誇り（ジェンダー自尊心）が高いほど同性愛者に対して否定的な態度をとることから（鈴木・池上，2015）、ジェンダー自尊心の高さが性別違和への否定的態度と正の相関にあることが予想される。

本研究の目的

中国本土では性別違和の存在を認められておらず、十分に正しい知識が伝わっていないという研究がたくさん見られた。したがって、日本に比べて中国のほうが性別違和の認知度は低くなると考えられる。また、性別違和における態度では、知識の多さは性別違和に対する否定的態度を弱め（日向他，2007；福岡，2015）、性別二元制の考えが強いほど性別違和への偏見が強まる（Norton & Herek, 2013）。したがって、日本に比べて中国の学生のほうが性別違和に対する否定的態度が高くなる可能性がある。

そこで、本研究では、先行研究で集めた性別違和者と同性愛者に対する態度尺度の項目を参考し、日中大学生の性別違和に対する態度の違いを調べ、性差を検討することを目的とする。また、日本において、知識や接触経験やジェンダー自尊心などの尺度を用いて、態度に関連している要因を探求する。

方法

調査協力者 2018年9月に日本及び中国の大学生を対象とし、調査を行なった。欠損値が見られた者および性別不明の対象者を除外し、分析対象は日本人343名（男性92名、女性251名）、中国人309名（男性103名、女性206名）であった。

手続き 日本ではGoogle Formを、中国ではアンケートサイト「問巻星」を使い、QRコードとURL

を用い、ウェブ上で質問紙調査を実施した。調査開始前に性別違和の定義について説明し、調査意図と回答は自由意志によることを口頭または書面で説明し、同意を得た。本調査は関西大学大学院心理学研究科倫理委員会の承認を得て行った。

質問項目

1. 日本の質問紙項目

(a)性別違和への認知度を尋ねた福岡(2015)の項目を用いた。「性別違和について、以前から聞いたことがありますか」という問いに対して、「はい」「いいえ」の2件法で尋ねた。

(b)性別違和および同性愛者に対する態度尺度を参考に、項目を選出した。なお、同性愛者に対する態度尺度の項目においては、針間・相馬(2004)を参考に性別違和にも共通して見られる態度を選出した。使用した尺度は、日向他(2007)の性別違和との社会的距離7項目、山下・源氏田(1996)の同性愛者に対する好意的項目より17項目、和田(1996)の同性愛者に対する態度尺度より15項目、宮澤・福富(2008)のレズビアンに対する態度尺度より17項目(ただし、「レズビアン同士の結婚も法律的に認められるべきだ」は、「性別違和の戸籍変更は法律的に認められるべきだ」と変更した)。以上、全部で56項目。「1.全くそう思わない～5.全くそう思う」の5件法で回答を求めた。

(c)福岡(2015)の精神障害者への接触経験の質問をもとに、性別違和との接触経験を尋ねた5項目を用いた。「はい」「いいえ」の2件法で尋ねた。

(d)日向他(2007)の性別違和についての知識の6項目と、福岡(2015)の性別違和についての知識より日向他の項目と異なる14項目を用いた。各項目に対して「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求めた。

(e)鈴木・池上(2015)のジェンダー自尊心尺度を用いた。性別に基づくアイデンティティへの自己評価を問う3項目、「1.全くそう思わない～7.非常にそう思う」の7件法で回答を求めた。

2. 中国の質問紙項目

(a)性別違和への認知度を尋ねた福岡(2015)の項目を中国語に翻訳し、2件法で尋ねた。

(b)日本の質問紙と同じ、態度尺度の56項目を中国語に翻訳して利用した。日本語のできる中国人3人(うち心理学専攻2人)が日本語版の態度項目の

内容を中国語に翻訳し、原文である日本語版の内容と完全に一致しているかどうかを確認した。また、中国語版尺度の項目内容の表現が中国の大学生にとって十分に理解できるか、文章のニュアンスに問題がないか、中国在住の7人に確認し、再び修正が加えられた。

結果

日中大学生の性別違和名称への認知度

「性別違和」という名称に対する認知度は、日本では63.6%、中国では47.9%であり、有意差が認められた($\chi^2(1)=16.19, p=.001$)。予測通り、日本大学生より中国大学生の認知度の方が低いことが見られ、河嶋(2018)の結果と一致している。

日中大学生の性別違和に対する態度項目の分析

収集された56項目の項目分析を行なった。日本において、床効果が確認された7項目を除外し、主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行なった。因子負荷量の絶対値が.35以上、共通性が.17以下の項目を除外した。また、固有値の減衰状況およびスクリープロットの検証を合わせて、分析を繰り返した結果、最終的に4因子40項目が抽出された。一方中国において、天井効果が確認された2項目は本研究では必要である項目(14, 15)と考えたため、採用した。因子分析は日本と同様の基準に従って、繰り返した結果、4因子38項目が抽出された。日中の4つの各因子では、多くの共通項目が見られた。そこで、日中大学生の態度の違いを検討するために、共通していない項目を削除し、再度因子分析を行った結果、日中において同じ因子構造の4因子計22項目がそれぞれ抽出された(Table 1)。

第1因子は「近寄りにくい」「嫌悪感を抱く」など、性別違和者との心理的な接触や社会的距離に関する項目が見られたため、「心理的距離」因子と命名した。第2因子は「お見合いしてもよい」など、性別違和者を恋愛対象として考えられるかを問う項目のため、「恋愛好感度」と命名した。第3因子には、「社会は性別違和に冷たすぎる」など、性別違和の社会的地位に対する容認度の項目が見られたため、「社会的ポジションの承認」因子と命名した。第4因子には、「人生を楽しんでいる」「自分の生き方に自信を持っている人が多い」など、性別違和者に対するポジティブなイメージを持ち、性別違和という存在

Table 1 日／中・性別違和に対する態度の因子分析結果

	日本					中国								
	F1	F2	F3	F4	共通性	M	SD	F1	F2	F3	F4	共通性	M	SD
F1 「心理的距離」 (8項目) 日本: $\alpha = .796$/中国: $\alpha = .891$														
37. 関わりあいたくない	.749	-.063	.059	-.032	.567	1.74	0.84	.691	-.115	-.085	-.047	.671	2.06	1.02
34. 一緒に働いてもよい*	-.726	-.059	.083	-.020	.552	4.51	0.71	-.584	.000	.125	.135	.539	4.09	0.97
22. 近寄りにくい	.627	-.044	.049	-.018	.393	2.34	1.19	.642	-.029	.041	.002	.396	1.83	1.01
10. 嫌悪感を抱く	.582	-.105	-.115	.008	.464	1.85	0.86	.710	-.064	-.076	.107	.551	1.94	1.04
50. 精神的に不健康である	.575	.026	-.018	.033	.325	1.56	0.82	.781	-.091	.102	-.086	.645	1.94	1.06
11. 社会に悪影響を与える存在だ	.552	.081	-.047	.138	.296	1.35	0.68	.724	.011	-.089	.154	.521	1.88	1.00
48. 友達が少ない	.481	.109	.243	-.148	.218	2.23	1.09	.587	.107	.207	-.274	.371	2.14	1.03
40. 性別違和は自然ではない	.463	-.082	-.069	-.021	.285	1.98	0.99	.694	-.008	-.111	-.016	.599	1.88	1.01
F2 「恋愛好感度」 (4項目) 日本: $\alpha = .809$/中国: $\alpha = .814$														
07. 結婚することがあるかもしれない	.112	.864	.024	-.042	.718	2.37	1.16	.019	.858	-.024	.055	.746	2.49	1.20
04. 恋愛することがあるかもしれない	.045	.832	-.025	.037	.650	2.53	1.19	-.002	.821	-.041	-.026	.632	2.68	1.28
31. お見合いしてもよい	-.064	.726	-.041	.009	.543	2.36	0.99	-.004	.656	.064	.028	.489	2.83	1.10
30. 好きな人が性別違和だったら気持ち冷める*	.194	-.460	.022	.004	.301	3.25	1.08	.222	-.543	.088	.112	.333	2.80	1.13
F3 「社会的ポジションの承認」 (5項目) 日本: $\alpha = .729$/中国: $\alpha = .760$														
13. 性別違和の人の人権を国がもっと擁護すべきだ	-.012	-.036	.719	.048	.526	3.80	0.90	-.186	-.134	.646	-.109	.465	3.91	1.11
16. 性別違和のための社会的な活動 (署名等) に参加すべきだ	.012	.035	.663	.030	.454	3.24	0.90	.021	.215	.593	-.053	.460	3.59	1.10
17. 性別違和の人は安心して過ごせる場所があるべきだ	-.016	-.009	.575	.041	.347	4.17	0.75	-.267	-.139	.694	.003	.678	4.22	0.93
43. 社会は性別違和に冷たすぎる	.080	-.067	.512	-.015	.221	3.63	0.90	.101	-.047	.517	.103	.244	3.30	0.89
44. 性別違和の戸籍変更は法的に認められるべきだ	-.116	.031	.485	-.019	.303	3.97	0.92	.020	.082	.483	.152	.352	3.50	1.08
F4 「ポジティブイデオロギイ共感」 (5項目) 日本: $\alpha = .719$/中国: $\alpha = .644$														
08. 自分の生き方に自信を持っている人が多い	.020	.006	-.061	.678	.445	3.51	1.02	-.205	-.072	-.144	.433	.219	3.28	0.96
24. 人生を楽しんでいる	-.022	.011	-.081	.663	.427	3.48	0.88	-.193	-.064	-.004	.458	.290	3.33	1.01
35. 自分に正直な人が多い	.033	-.014	.099	.659	.463	3.83	0.88	-.114	.021	.030	.524	.366	3.33	0.80
55. 感受性が豊かだ	.033	.006	.057	.503	.260	3.49	0.84	.191	.121	.286	.408	.316	3.18	0.79
52. 純粋だ	-.031	-.007	.131	.387	.193	3.28	0.85	.173	.015	.138	.567	.331	3.14	0.88
因子間相関														
	2	-.339												
	3	-.412	.279											
	4	-.127	-.158	.179										

注) *は逆転項目

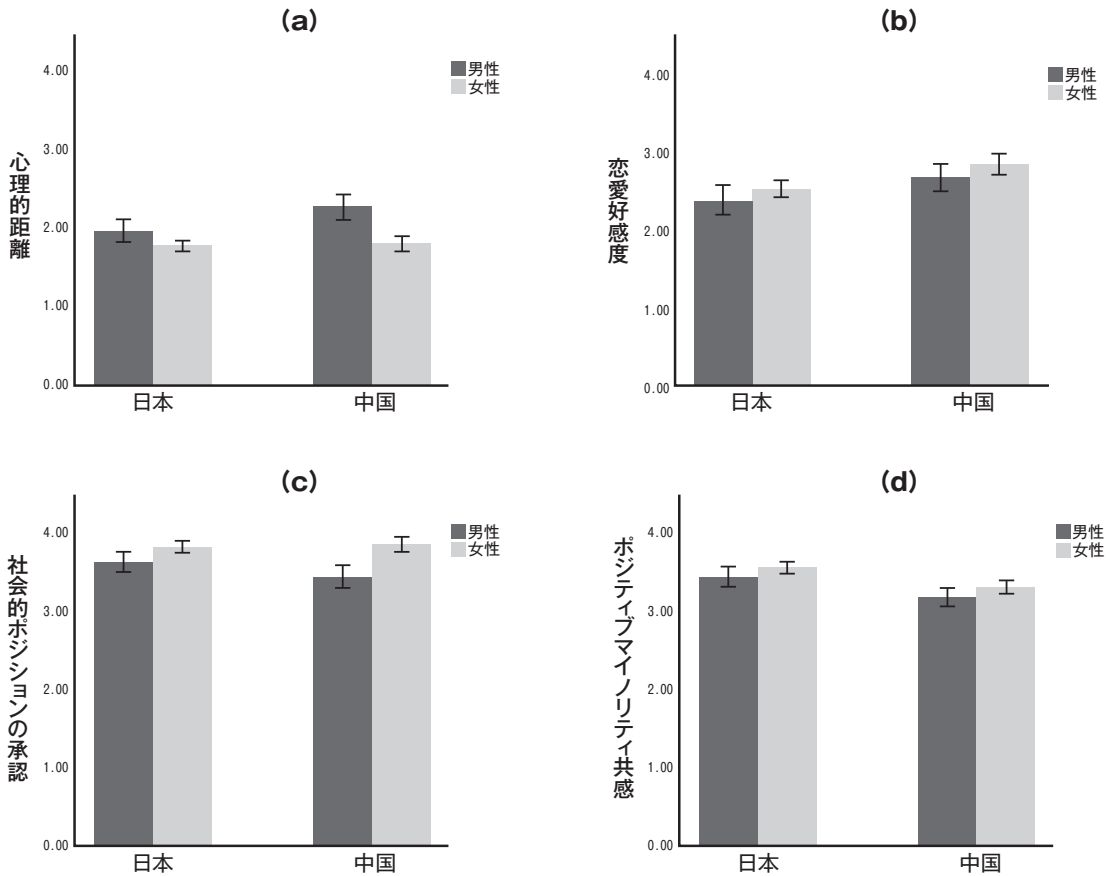


Figure 1. 日中における態度尺度の平均値
(エラーバーは標準誤差)

に対して肯定的な視点で見ている項目が集まっているため、「ポジティブマイノリティ共感」と命名した。信頼性では、心理的距離 $\alpha = .796$ (日)/ $.891$ (中)、恋愛好感度 $\alpha = .809$ (日)/ $.814$ (中)、社会的ポジションの承認 $\alpha = .729$ (日)/ $.760$ (中)、ポジティブマイノリティ共感 $\alpha = .719$ (日)/ $.644$ (中)であり、十分な信頼性を示した (Table 1)。

また、日中因子構造の因子不変性を確認するために、同モデルを基に、日本大学生と中国大学生グループの2つの異なる群のデータを用い、多母集団同時分析を実施した。分析では、複数のグループの間において同一モデルの検証を行うために、等値制約を導入し、配置不変性モデルと測定不変性モデルの適合度を比較した。その結果、配置不変性モデルを採用した。適合度指標は $\chi^2 = 901.297$, $df = 406$, $p < .001$, GFI = .887, AGFI = .860, NFI = .828, CFI = .896,

RMSEA = .043, AIC = 1101.3であった。ある程度許容できる適合度が見いだされ、日中での因子構造の因子不変性が示された。

日中大学生の態度比較と男女差

日中大学生の態度比較では、4つの下位因子に対して、性別と国籍による二要因分散分析を行なった。「心理的距離」では、国籍の主効果 ($F(1, 648) = 8.25$, $p = .004$, $\eta_p^2 = .013$)、性別の主効果 ($F(1, 648) = 34.35$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .050$)、国籍と性別の交互作用 ($F(1, 648) = 5.78$, $p = .016$, $\eta_p^2 = .009$) が有意であった (Figure 1a)。単純主効果の検定を行った結果、男性における国籍の単純主効果は有意であり ($F(1, 648) = 9.95$, $p = .002$, $\eta_p^2 = .015$)、女性は有意ではなかった ($F(1, 648) = 0.18$, $p = .669$, $\eta_p^2 < .001$)。男性では日本人より中国人の得点が有意に高かった。また、

性別の単純主効果は日本の大学生 ($F(1, 648) = 5.92, p = .015, \eta_p^2 = .009$) および中国の大学生で有意であった ($F(1, 648) = 34.50, p < .001, \eta_p^2 = .051$)。どちらの国も女性より男性の点数が有意に高かった。

「恋愛好感度」では、国籍の主効果 ($F(1, 648) = 14.88, p < .001, \eta_p^2 = .022$)、性別の主効果 ($F(1, 648) = 4.07, p = .044, \eta_p^2 = .006$) が有意であったが、交互作用 ($F(1, 648) = 0.04, p = .837, \eta_p^2 < .001$) が有意ではなかった (Figure 1b)。日本人に比べ中国人で有意に点数が高く、また男性よりも女性で有意に恋愛好感度が高かった。

「社会的ポジションの承認」では、国籍の主効果 ($F(1, 648) = 1.98, p = .160, \eta_p^2 = .003$) は有意ではなかったが、性別の主効果 ($F(1, 648) = 29.25, p < .001, \eta_p^2 = .043$) は有意であり、交互作用 ($F(1, 648) = 3.81, p = .051, \eta_p^2 = .006$) は有意傾向であった (Figure 1c)。単純主効果の検定の結果、男性における国籍の単純主効果は有意であったが ($F(1, 648) = 4.03, p = .045, \eta_p^2 = .020$)、女性は有意ではなかった ($F(1, 648) = 0.25, p = .619, \eta_p^2 = .001$)。男性では中国人より日本人の得点が有意に高かった。また、性別の単純主効果は日本の大学生 ($F(1, 648) = 5.91, p = .015, \eta_p^2 = .017$) および中国の大学生で有意であった ($F(1, 648) = 34.50, p < .001, \eta_p^2 = .082$)。どちらの国も男性より女性の点数が有意に高かった。

「ポジティブマイノリティ共感」では、国籍の主効果 ($F(1, 648) = 26.84, p < .001, \eta_p^2 = .040$)、性別の主効果 ($F(1, 648) = 5.50, p = .019, \eta_p^2 = .008$) が有意であったが、交互作用 ($F(1, 648) = 0.05, p = .830, \eta_p^2 < .001$) は有意ではなかった (Figure 1d)。中国人よりも日本人で有意に点数が高く、また男性よりも女性で有意に点数が高かった。

日本大学生における関連要因の分析

日本大学生における性別違和に対する態度の関連要因を探索するために、下位の4因子と接触尺度、知識尺度、ジェンダー自尊心との相関関係を求めた (Table 2)。先行研究通り、接触経験は否定的な態度を示している「心理的距離」との間に弱い負の相関が見られた。また、「恋愛好感度」と「社会的ポジションの承認」との間に弱い正の相関が見られた。「ポジティブマイノリティ共感」との相関関係は見られなかった。そして、知識は「恋愛好感度」と弱い正の相関が見られ、「ポジティブマイノリティ共感」と弱い負の相関が見られた。先行研究と異なり、「心理的距離」と「社会的ポジションの承認」との相関はなかった。最後に、ジェンダー自尊心は「恋愛好感度」とは弱い負の相関、「ポジティブマイノリティ共感」と弱い正の相関が見られた。「心理的距離」と「社会的ポジションの承認」では先行研究と異なり、相関はなかった。

考察

日中大学生の性別違和に対する態度の違いと性差

本研究では、日中大学生において、性別違和に対する態度の違いと性差を検討することを目的とした。日中で共通した態度項目を取り上げ、「心理的距離」「恋愛好感度」「社会的ポジションの承認」「ポジティブマイノリティ共感」の4因子計22項目がそれぞれ抽出された。さらに、多母集団同時分析の結果より、日中の因子構造は同じであることが示されたため、日中の態度比較が可能となった。

和田 (1996)、日向他 (2007)、宮澤・福富 (2008) の性別違和、同性愛者に対する態度尺度では「心理的距離」因子と「社会的ポジションの承認」因子が

Table 2 日本・性別違和に対する態度と関連要因の結果

	心理的距離	恋愛好感度	社会的ポジションの承認	ポジティブマイノリティ共感
日本・性別違和に対する態度				
心理的距離	-	-	-	-
恋愛好感度	-.291**	-	-	-
社会的ポジションの承認	-.319**	.197**	-	-
ポジティブマイノリティ共感	-.110*	-.115*	.176**	-
接触経験	-.219**	.145**	.249**	.072
知識	-.098	.154**	.083	-.118*
ジェンダー自尊心	.065	-.249**	.035	.135*

** $p < .01$, * $p < .05$

得られており、本研究の場合でも一致した因子構造が抽出された。また、性別違和者を恋愛対象とする「恋愛好感度」因子は、日向他(2007)や和田(1996)での社会的・心理的距離の一部として扱われていたが、本研究では独立し新しい因子となった。心理的距離は人間関係の近さを示す距離感だが、恋愛好感度はさらに近い人間関係を示し、望んでいる性別で生きている当事者のことをどのように受け止めているのかの認識である。よって、性別違和に対する「恋愛好感度」は社会的・心理的距離から分離し、より一層親密な関係性を示している因子になった。また、「ポジティブマイノリティ共感」因子について、日中とも楽観的な態度で性別違和の存在を認識し、性別違和の存在を肯定的に捉え、積極的な面を多く注目している。しかし、性別違和に対するマイノリティ共感とは肯定的な視点だけでは十分とは言えない。マイノリティ共感とは共感者自分自身の経歴から他者が経験してきたこと(主に差別、偏見、人権侵害や過酷な体験など)に敏感になり、共感的な態度を示すようになることである(葛西・小渡, 2018; 葛西, 2019)。厳しい社会環境の中、性別違和当事者は常に生きづらさを感じている。しかし、ポジティブな視点だけで性別違和を受け入れることは性別違和の体験を共感できると言い難い。当事者を肯定する一方、当事者が今まで経験してきたこと、苦悩している姿、社会に受け入れるために努力してきた姿なども合わせて共感することが大きな支えになる。

日中大学生の性別違和への態度を比較検討した結果、男女問わず、中国大学生は日本大学生より「恋愛好感度」が高くなり、「ポジティブマイノリティ共感」がより低いことが明らかとなった。また、予測通り、男性においては、中国大学生のほうが「心理的距離」では最も遠い距離を置きながら、「社会的ポジションの容認」においては最も低い承認を示していることが明らかになった。女性においては、国を問わず、男性より最も近い「心理的距離」をとることが分かり、「社会的ポジションの容認」においては最も高い受容度を示していた。全体から見ると、日本人大学生は性別違和に対する「心理的距離」が近く、「社会的ポジションの承認度」と「ポジティブ・マイノリティ共感」が高くなる一方、「恋愛好感度」が低くなっていることが明らかになった。その結果から、日本人大学生は性別違和の存在を肯定し、尊重することができるが、恋愛対象として考えるこ

とが難しいことが考えられる。また、中国人大学生は性別違和に対する「心理的距離」が高く、「社会的ポジションの承認度」と「ポジティブ・マイノリティ共感」が低くなることから、性別違和に対する受容度が比較的に低いことが明らかになった。

全体から性差を見ると、女性は男性より肯定的な態度を示し、受容度が高かった。様々な人種において、男性に比べ女性での性別違和に対する嫌悪感の低さが示されており(Carroll et al., 2012; Chen & Anderson, 2017; 日向他, 2007; 河嶋, 2018; Nagoshi et al., 2008; 佐々木, 2018)、女性の心理的距離の低さは人種、文化に依存しない可能性が考えられる。また、女性において日中に差が見られなかった要因として、フェミニズムとの関連性が考えられる(砂田, 2017)。男性が主導権を握っている社会では、女性の社会地位が低くなっていることが見られる。そのため、女性もある種のマイノリティであるため、マイノリティである性別違和に対して社会的に容認する傾向にあるのではないかと考えられる。

先行研究から独立した「恋愛好感度」因子では、日中共に予測外の結果が見られた。日本において、男女問わず性別違和に高い尊重と承認を示していることにも関わらず、最も低い恋愛好感度を示していることが見られた。近年の日本社会では、ダイバーシティの概念が浸透し始め、職場においても学校においてもダイバーシティの制度と教育を推進している(正木・村本, 2017; 森, 2018)。性別違和に対する高い受容度はこのような政策や教育などに影響されていることが考えられる。しかし、プライベートと関連している「恋愛好感度」については、決められた政策がないため、個人の自由意志を表している可能性が高いことがわかった。また、日本では性別違和を含むLGBTの認知度は高いため、よりリアルに性別違和の性的指向を同性愛にイメージされ、性別違和を恋愛対象としても考えにくく、拒否反応が生じることが考えられる。中国においては、女性と比べ男性の方が最も高い嫌悪感を示しているにも関わらず、高い恋愛好感度も示していることが見られた。嫌悪感において、中国男性の態度は先行研究と一致している(Carroll et al., 2012; Chen & Anderson, 2017; 日向他, 2007; 河嶋, 2018; Nagoshi et al., 2008; 佐々木, 2018)。恋愛好感度においては、中国では性別違和の認知度は低いため、十分な知識が普及していなく、日本と比べて、性別違和の定義と概念も十

分に浸透していないことが考えられる。そのため、中国人は性別違和の概念と同性愛者または両性愛者の概念と混同し、恋愛対象としては考えられる可能性が高いことが考えられる。

「ポジティブマイノリティ共感」項目については、日本の大学生は性別違和の生き方を肯定的に捉えやすいという結果が得られた。実際、これまでも性別違和を知ることで肯定的な態度が高まることが示されている（日向他, 2007; 福岡, 2015）。一方で、当事者は実際の生活上で苦しみを抱える実態、苦悩する姿、過酷な体験、社会からの不理解、生きづらさなどの側面を認識しにくいことも考えられ、性別違和当事者に対する理解と現状の認識はまだ不足していることがわかった。

日本における関連要因の解明

本研究では、日本人大学生を対象者とし、性別違和に対する態度の関連要因を検討した。まず、接触効果では、先行研究と同じ、性別違和との接触経験が高いほど性別違和に対するポジティブなイメージを持ち、嫌悪感情を弱める結果を示している（福岡, 2015; King, Winter & Webster, 2009）。性別違和当事者との接触が増えるほど、理解が生じ、社会存在を認めやすくなり、心理的距離を縮むことが考えられる。また、接触機会が増えることで、性別違和者を知る機会も増え、恋愛対象として認識できることも可能になると考えられる。知識では、先行研究より、性別違和の知識があるほど性別違和に肯定的な態度を示し、社会的距離が縮まることが見られた（日向他, 2007）が、本研究では同じ相関は見られなかった。しかし、知識が増えることも接触と同じ、間接的に性別違和者を知る機会も増え、恋愛対象としても考えられる。知識とポジティブマイノリティ共感が負の相関が出たことから、知識が多ければ多いほど性別違和に対する認識が豊富なり、マイノリティ共感をより包括的に認識できると考えられ、性別違和ポジティブな面だけでなく、苦しみなどネガティブな面に対してもある程度理解して、共感していると考えられる。そして、ジェンダー自尊心では、女性異性愛者に比べ、男性異性愛者においてジェンダー自尊心が高いほど同性愛者に対して否定的な態度を示していることから（鈴木・池上, 2015）、ジェンダー自尊心が高いほど、性別違和者に対する否定的な態度から恋愛距離が遠くなり、マイノリティ共

感も不十分になることが推察される。

研究の限界と展望

本研究の限界について、3点あげられる。一つ目は、サンプルの問題である。日中問わず、女性のサンプル数が男性より多かった点である。本研究では、日中大学生の性別違和に対する態度の違いと男女差に着目し検討を行った。今後は男子生徒の数を増やし、より均等なサンプルサイズを用いて検討を行う必要があると考える。二つ目は、恋愛関係に関する項目を答える際、想像していた性別違和対象者のタイプが異なっている可能性が考えられる。今後は性別違和に対する態度を解明する際、タイプごとに態度を測り、より詳細に検討する重要性があると見られる。三つ目は、本研究で使った態度尺度の結果では、信頼性の結果を再テストせず、妥当性も図らずという疑問を残っていた。今後は、タイプごとに性別違和に対する態度を測る尺度を検討し、サンプル数を増やし、幅広い年齢層の人々を対象にしてより詳細な調査をしていきたい。

注

- 1) リリー・エルベ：世界初の性別適合手術（男性から女性）を受けた人物である。
「リリー・エルベ」（2021年8月17日（火）17:31 UTCの版）『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AA%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%99>
- 2) 「トランスジェンダー 選手が東京五輪代表に、五輪出場は史上初「不公平」と物議も」BBC NEWS JAPAN, 2021年6月21日（最終閲覧日：2021年8月18日）
<https://www.bbc.com/japanese/57550038>
- 3) トランスジェンダー：生まれた時に割り当てられた性別が自身の性同一性または性表現と異なる人々を示す包括的な用語である。
「トランスジェンダー」（2021年8月17日（火）17:32 UTCの版）『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%BC>

引用文献

- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5th edition (DSM-5)*. Washington, DC.: American Psychiatric Publishing. (日本精神神経医学会(監修)(2014). DSM-5—精神疾患の診断・統計マニュアル— 医学書院)

- Carroll, L., Güss, D., Hutchinson, K. S., & Gauler, A. A. (2012). How do US students perceive trans persons? *Sex Roles: A Journal of Research, 67*, 516-527.
- Chen, B., & Anderson, V. N. (2017). Chinese college students' gender self-esteem and trans prejudice. *International Journal of Transgenderism, 18*(1), 66-78.
- 趙凱月・斉藤美保子 (2019). 意識調査から見た中国人大学生のジェンダー意識 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 28, 67-76.
- 福岡欣治 (2015). 大学生の性同一性障害に関する経験と認識—医療事務職になりうる学生に注目して 川崎医療福祉学会誌, 25, 183-192.
- Gerhardstein, K., & Anderson, V. (2010). There's more than meets the eye: Facial appearance and evaluations of transsexual people. *Sex Roles, 62*, 361-373. doi:10.1007/s11199-010-9746-x.
- Glotfelter, M. A., & Anderson, V. N. (2017). Relationships between gender self-esteem, sexual prejudice, and trans prejudice in cisgender heterosexual college students. *International Journal of Transgenderism, 18*, 182-198. https://doi.org/10.1080/15532739.2016.1274932
- Hill, D. B., & Willoughby, B. L. B. (2005). The Development and Validation of the Genderism and transphobia scale. *Sex Roles, 53*, 531-544.
- 針間克己・相馬佐江子 (2004). 性同一性障害 30 人のカミングアウト 双葉社
- 日向桂子・高田谷久美子・近藤洋子 (2007). 看護学生と他領域の学生の性同一性障害に対する態度や知識と性差観に関する研究 山梨大学看護学会誌, 6 (1), 39-44.
- 正木郁太郎・村本由紀子 (2017). 多様化する職場におけるダイバーシティ風土の機能、ならびに風土と組織制度との関係 実験社会心理学研究, 57 (1), 12-28.
- King, M. E., Winter, S., & Webster, B. (2009). Contact reduces transprejudice: A study on attitudes towards transgenderism and transgender civil rights in Hong Kong. *International Journal of Sexual Health, 21* (1), 17-34.
- 角田和也 (2018). 小・中・高等学校のセクシャルマイノリティ: 文献の学際的研究から現状を探る 日本女子体育大学紀要, 48, 88-99.
- 河嶋静代 (2018). 日本と中国の大学生の LGBT に関する意識についての試論的検討 (河嶋静代教授 退職記念号) 北九州市立大学文学部紀要, 25, 1-46.
- 葛西真記子・小渡唯奈 (2018). 「性の多様性を認める態度」を促進する要因: セクシュアルマジョリティへのインタビュー調査 鳴門教育大学研究紀要, 33, 50-59.
- 葛西真記子 (2019). マイノリティ共感 (Inter-minority Empathy): 「性の多様性を認める態度」に関連する要因 鳴門教育大学研究紀要, 34, 136-141.
- 李哈・王良濱 (2018). 我国跨性別人群的医疗法律困境及对策研究 (我が国トランスジェンダーの医療と法律の問題および対策の研究) 中国卫生法制, 26 (06), 23-27.
- Morrison, M. A., Bishop, C. J., & Morrison, T. G. (2019). A systematic review of the psychometric properties of composite LGBT prejudice and discrimination scales. *Journal of homosexuality, 66* (4), 549-570.
- 宮澤仁・福富護 (2008). 同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連 東京学芸大学紀要, 59, 211-221.
- 松嶋淑恵 (2013). 性別違和をもつ人々の実態調査: 経済状況, 人間関係, 精神的問題について 人間科学研究, 34, 185-208.
- 森朋子 (2018). 大学における「ダイバーシティ & インクルージョン教育」の重要性 東京家政学院大学紀要, 58, 19-27.
- Nagoshi, J. L., Adams, K. A., Terrell, H. K., Hill, E. D., Brzuzy, S., & Nagoshi, C. T. (2008). Gender differences in correlates of homophobia and transphobia. *Sex Roles: A Journal of research, 59*, 521-531.
- Norton, A. T., & Herek, G. M. (2013). Heterosexuals' attitudes toward transgender people: Findings from a national probability sample of U.S. adults. *Sex Roles: A Journal of research, 68*, 738-753.
- 鈴木文子・池上知子 (2015). 異性愛者のジェンダー自尊心と同性の同性愛者に対する態度 1 社会心理学研究, 30 (3), 183-190.
- 砂田恵理加 (2017). フェミニズムの歴史から考えるアメリカ女子大学の行方: トランスジェンダー学生の受け入れをめぐる 國士館大學政経論叢, 29 (1), 25-50.
- 佐々木掌子 (2018). 中学校における「性の多様性」授業の教育効果 教育心理学研究, 66, 313-326.
- Tebbe, E. A., Moradi, B., & Ege, E. (2014). Revised and abbreviated form of the genderism and transphobia scale: Tools for assessing anti-trans prejudice. *Journal of Counseling Psychology, 61* (4), 581-592.
- 陶林・張玲・王春华 (2005). 想改变性别的高中父母养育方式与心理健康状况研究 (性別を変えたいある高校生の両親の育ち方および心理健康状況についての研究) 中国性科学, 02, 35-36+42.
- Winter, S., Webster, B., & Cheung, P. K. E. (2008). Measuring Hong Kong undergraduate students' attitudes towards trans people. *Sex Roles, 59*, 670-683. doi:10.1007/s11199-008-9462-y.
- 和田実 (1996). 青年の同性愛に対する態度: 性および性別役割同一性による差異 社会心理学研究, 12 (1), 9-19.

湯川隆子・高橋恵子・帯刀益夫・佐々木掌子・柏木恵子 (2013). 「性差」をどうとらえ、扱うか：性別二元性を問う 日本教育心理学会総会発表論文集第 55 回総会発表論文集, pp. S2-S3.

山下玲子・源氏田憲一 (1996). 同性愛者に対する態度についての一研究：男女差，メディア接触量を中心として 一橋研究, 21 (2), 163-177.

张祥荣・梁音・龙兴云 (2018). 中国家長の性教育認知と理念更新 (中国保護者の性教育の認知と理念の更新) 現代交際, 19, 156-158.

付記

本論文は、以下の抄録原稿に、同一著者らが大幅な加筆・修正を加えて再構成したものである。

陳曦・守谷順 (2018). 性別違和への態度尺度作成の試み 日本パーソナリティ心理学会第 27 回大会発表論文集, 133.

本研究は関西大学大学院心理学研究科・研究教育倫理委員会の審査を受け、承認を得た。

謝辞

心よく質問紙調査に協力して下さった日本と中国の皆さんに、心よりお礼申し上げます。

利益相反

著者全員がいかなる利益相反もないことを表明する。

著者分担

第 1 著者が本研究を提案し、実験の実施、データ分析を行い、草稿をまとめた。第 2 著者と第 3 著者は研究デザインと分析計画に助言を行い、草稿の修正を行った。最終稿は 3 人で確認した。

著者紹介

陳 曦 関西大学大学院心理学研究科 D3。2019 年 3 月に関西大学大学院心理学研究科前期課程修了，修士 (心理学)。2019 年 4 月に関西大学大学院心理学研究科後期課程に進学し，現在在籍中。

守谷 順 関西大学大学院心理学研究科 准教授

脇田貴文 関西大学大学院心理学研究科 教授

Correspondence concerning to this article should be addressed to Ms. CHEN at chinngi6366@yahoo.co.jp.

要 旨

日本では性別違和に対する態度研究が主に医療現場の学生を対象者としており、幅広い分野の学生の態度を測る研究は十分に検討されているとは言い難い。中国本土では、性別違和に対する態度研究は十分なされておらず、さらには伝統的な性別二元制の思想に支配され、性別違和に関する十分な知識が提供されていない可能性が高い。そこで、本研究では、日本の大学生 (男性 92 人、女性 251 人) と中国の大学生 (男性 103 人、女性 206 人) が性別違和に対する態度を比較することを目的とした。先行研究より性別違和に対する態度を測定する 56 項目を収集し、日中大学生にウェブ調査を行った。その結果、日中を問わず、男性は女性より性別違和者に対する心理的距離が高く、恋愛好感度が低かった。そして、中国人は心理的距離と恋愛好感度が日本人より高く、性別違和に対する社会的ポジションの承認が最も低かったことがわかった。また、性別違和に対するポジティブマイノリティ共感では、男性より女性の方が高いことが示唆された。

キーワード：性別違和，態度，偏見，日中比較，男女差

